

## 私の看護実践の原点とキャリア

川野 良子（東京女子医科大学 統括看護部長）

私は 1975 年東京女子医科大学看護短期大学を卒業し、東京女子医科大学病院に就職しました。看護を学ぶきっかけは、高校受験後に発症し闘病生活を強いられた疾病が影響しています。「自分の病気を理解しないと将来の目指す方向に向えない。」と本学に入学した私は、2 年次に自分は急性糸球体腎炎にかかっていたと理解しました。看護師として働くつもりがない私が入職したのは、卒業前の総合実習で指導を受けた教授の影響でした。「1 年は働いてみようか・・・」という不純な気持ちで、脳神経センター I C U に配属されました。

### <看護師としてスタート>

当時の私は看護に関心がなく、脳神経のメカニズムの学習に充実感を得ていました。その頃、緊急で搬送された回復の見込みがないと診断された男性患者の妻が面会時に「手をにぎった」と言われました。これを発端に、患者は少しずつ意識が回復し、8 か月後に意思疎通がとれるまでに回復しました。もし、あの時諦めていたら・・・ひとりの可能性のある命が絶たれていたかもしれない。そして、医学的な観点では語れない人間の生への力と看護の可能性を身震いしながら実感しました。そして、この体験こそが私が看護を続けるスタートであり、原点でもあります。

### <転機 1>

神経精神科に管理職として異動した私は、精神科病棟の看護師が、患者や弱者のあるがままの姿を受け入れ、対象の生き様や見えない気持ちや心に寄り添うケアの姿に感動し、看護師として他者を理解する力を養うという私のキャリアに発展しました。マザーテレサの言葉を信じひたすら師長が看護師の為にできることを考え実践した 9 年間でした。

### <転機 2>

その後は、総合外来センター建築プロジェクトの一員として臨床の第一線から離れることになりましたが、患者目線で本当に患者中心の医療施設を模索しながら、「ひとつの外来」を目指し、「ケアルーム」という外来看護師が患者ケアを行う室名が誕生しました。

臨床現場を離れたからこそ見えた「器が中身を変える」という体験がキャリアに繋がりました。

### <転機 3>

平成 16 年、副部長職では最も経験の浅い未熟な私が看護部長に就任できたのは、「女子医大の看護同窓会代表」という多くの支援があったからでした。直接ケアや看護師との関りから遠く立場だからこそ、「患者」や「患者ケアを実施している看護師」の為に、働くための「ケアのサイクル」をモットーに副部長と一体感を作り、看護師長の力を借りて看護部運営を行いました。

現在、東京女子医科大学の看護部門を統括する任に就いていますが、昨今の女子医大の環境の中で磐石な看護部体制の構築と医療施設を越えた看護職の連携が最大の課題です。

そして、看護職としても、看護管理者としても、いまだに発展途上であると痛感します。

看護という仕事を通して、多くの人と出会い、助けられながら、「したいこと」に変え、「でき

ることを実践する」ことで、人間としてだけでなく看護師として間違いなく成長したと確信しています。そして、まだ若干の伸び代があると信じつつ、新たな課題とキャリアに心を躍らせる今日この頃です。患者、そして患者に関わる臨床現場の看護職の為に・・・